

## 附属学校との連携による総合的な学習の時間への対応の可能性 ～ 学生と附属学校教員へのアンケート調査 ～

Possibility of Correspondence to Period for Integrated Study by Cooperation  
with Attached School : Questionnaire Survey to University Student and  
Teacher of the School

藤本 登 平尾 健二 森岡 亮  
Noboru FUJIMOTO Kenji HIRAO Akira MORIOKA  
長崎大学教育学部 福岡教育大学技術教育講座 大学院教育学研究科技術教育専攻

山内 あさみ 船津 建  
Asami YAMAUCHI Hajime FUNATSU  
宗像市青少年センター 国際共生教育講座

(平成18年10月2日受理)

### Abstract

総合的な学習の時間を担うことができる教員の育成を図ることを目的として、福岡教育大学学部生と附属学校担当教員に総合的な学習の時間に対するアンケート調査を行い、大学教育へのカリキュラム化を検討した。その結果、現在の大学カリキュラムには総合的な学習の時間に対応する科目が少なく学生の受講率は20%以下であった。学生が総合的な学習の時間を担うために必要と考える能力は、「専門的な知識よりも広範囲な知識」、「コミュニケーション能力」、「企画力」や「ファシリテーション能力」であり、附属学校担当教員が求めている能力と一致していることが分かった。また、学生は附属学校での実践に関する情報や実習活動を希望しており、附属学校もそれを提供できることが分かった。今後の課題はそれらを担当できる大学教員の確保である。

キーワード： 総合的な学習の時間、意識調査、大学教育

### 1. 緒言

総合的な学習の時間は平成14年度に完全実施されたが、研究・移行期間も含めれば、ほとんどの在学生在が何らかの該当授業を入学以前に受けてきたと言える。このような状況下で、福岡教育大学における総合的な学習の時間に関する講義・実習科目は、教養科目（総合科目）として「総合的な学習の時間（初等編）、同（中等編）」を開講しているが、その受講者数は55名と17名（初等教育教員養成課程1学年定員260名、中等教育教員養成課程1学年定員120名であり、数字は平成18年度の受講登録者数）と少なく、将来教員になった場合を考えると教科教育や道徳に比べ十分なカリキュラム構成になっているとは言い難い。

ところで、総合的な学習の時間に関する研究は、

完全実施前にはデューイなどの新教育運動や木下竹次の合科教育といった従来の総合学習と総合的な学習の時間の違いといった概念的なものや総合的な学習の時間の可能性について示したもの<sup>例えば</sup>1), 2)が多いのに対して、完全実施後は学校現場における総合的な学習の時間の問題点や課題を扱ったもの<sup>3)</sup>や実践例の紹介をしたものが多く、どちらかといえば学校教育の現場に焦点が当てられていた。

しかしながら、日本の教育制度を考えた場合、学生は年齢が高まるにつれてより細分化された知識を学ぶ既存価値到達型・講義型の教育スタイルで主に学んでおり、文部科学省の教員研修<sup>4)</sup>で見られるような体験的に相互に学び合い、価値を創造するような教育スタイルではほとんど学んでいな

い。従って、総合的な学習の時間のねらいである「問題解決能力の育成」、「主体的・創造的な学び方の育成」、「自己の生き方や考える力の育成」を育成するための教育方法を学部学生が学ぶ機会はほとんどなく、卒業研究が体験的に学ぶ唯一の機会と言える。また、総合的な学習の時間の受講体験の有無や内容の差が学生間にあることが学生自身から語られることも多い。このような状況の下、総合的な学習の時間を学校教育の一つの柱とするためには、教員養成単科大学・教育学部で、総合的な学習の時間の歴史やねらい、実践例の紹介をするだけでなく、実習を含めた教育方法のカリキュラム開発をする必要があると考えられる。

そこで、本研究では、総合的な学習の時間を担うことができる教員の育成を図ることを目的として、まず、在学生の総合的な学習の時間に対する認識や受講経験の有無や教員として必要と考えている能力などを調査した。そして、附属学校で「総合的な学習の時間」を担当している教員の意識と実施状況について調べた。さらに、附属学校や学生が総合的な学習の時間を学ぶカリキュラムとして大学に求める内容等について調査することで、附属学校との連携の可能性について考察した。

## 2. 学生の総合的な学習の時間に対する認識調査

### (1) アンケート調査の概要

アンケート調査は①大学生における「総合的な学習の時間」の認知度、②大学への「総合的な学習の時間」について講義・実習の受講状況と要望、及び③「総合的な学習の時間」の実践能力の有無について検討するために、平成17年12月～平成18年1月にかけて、福岡教育大学に在学している大学生に対して行った。総回答者数は310名であり、全てに回答した有効回答者数は258名(教育課程別に初等教育117名,中等教育78名,障害児教育9名,生涯教育54名である。学年別では1年生54名,2年生65名,3年生103名,4年生36名である)であった。以下に、調査結果を示す。

### (2) 「総合的な学習の時間」に関する受講経験

アンケートでは総合的な学習の時間を受けた校種とその内容を複数回答可で質問した。その結果を図1に示す。図より、有効回答数のうち155名の学生が未経験と答えているが、この理由は高等学校で完全実施された2003年時に高校3年生だった学生が多く、総合的な学習の時間が進路指導や補習に活用されたことで、受講した認識がないためと考えられる。一方、受講経験者は中学校と高等学校でそれぞれ68名と45名であり、その他は

7名であった。ここで、中・高等学校で受講したと回答した者についてその具体的な内容をみると、受講経験者が受けた内容は、小学校でエコクラブ、討論や命の大切さであり、中学校で職場体験、職業選択、環境問題、人権問題、地域交流、国際問題や学校行事、高等学校で進路学習、職場体験、職業選択、伝統文化、人権問題や授業の補講、大学で倫理や哲学であった。以上より、一部に学校行事や授業の補講といった総合的な学習の時間の目的と異なる活用が見受けられるが、テーマ的には趣旨に添ったテーマ設定がなされていることが分かる。

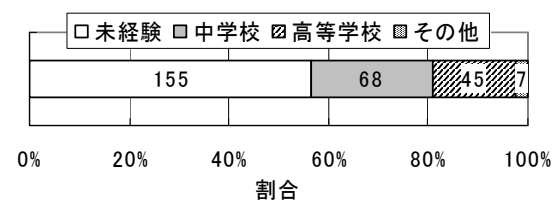


図1. 総合的な学習の時間の受講経験

### (3) 「総合的な学習の時間」に対して学生が抱くイメージ

総合的な学習の時間の受講経験の有無とは関係なしに、学生が抱いている総合的な学習の時間に対するイメージを質問したところ、約70%に相当する184名の学生が自分なりイメージを持っていることが分かった。まず、プラスのイメージを複数回答可能な選択設問として聞いたところ、図2の様な結果を示した。図より、「視点の拡張」、「他者との交流」、「問題解決能力の育成」や「社会問題の意識化」と行った総合的な学習の時間のねらいに沿った項目をより選択する傾向があるが、総合的な学習の時間の課題とされている教員間の連携には疑問を感じていることが分かる。また、グループ学習や外部との交流などの実践面を考えて、「コミュニケーション能力の育成」に総合的な学習の時間が貢献すると考えていることが分かる。一方、総合的な学習の時間で育成できるその他の能力としては、「自分で調べる能力」、「思いやる能力」、「表現能力」、「自分を見つめる能力」、「得意分野を伸ばせる能力」、「たくましく生きる能力」、「学び方を学ぶ能力」が挙げられていたが、その割合は僅かであった。

これに対し、学生が問題点と考えている内容を図3に示す。学生がイメージしている問題点は、総合的な学習の時間が「他教科の補充時間や学校行事などに活用される」、「学習目的が曖昧になる可能性がある」や、「評価が難しい」ことであり、

- |  |                               |
|--|-------------------------------|
| 1. 楽しい【7/14：14個の選択肢中の順位】                     | 8. 生徒がテーマに主体的関心を持つようになる【5/14】 |
| 2. 生きる力『問題解決能力』の育成【3/14】                     | 9. 学びの楽しさを知るようになる【10/14】      |
| 3. コミュニケーション能力の育成【6/14】                      | 10. 地域との出会いと交流と協力【2/14】       |
| 4. 上記以外の能力の育成（例えば○○能力）【13/14】                | 11. 将来に向けての職業選択【8/14】         |
| 5. 社会問題を意識させることができる（環境問題・福祉問題・国際理解etc）【4/14】 | 12. 教師自身も成長する【9/14】           |
| 6. 具体的な事実を知る【12/14】                          | 13. 教員相互の連携【11/14】            |
| 7. 自分の視野・考えを広げる【1/14】                        | 14. その他【14/14】                |

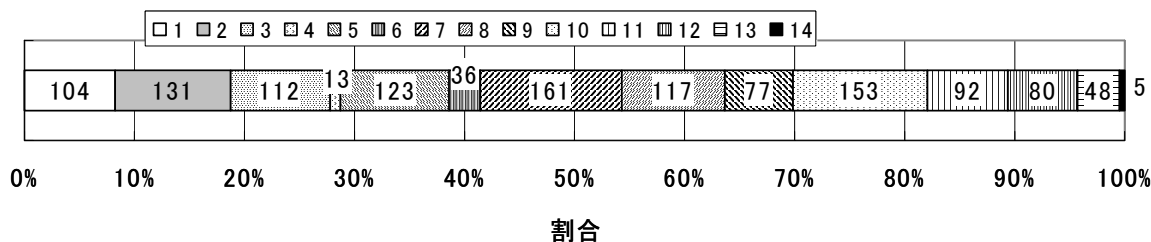


図2. 「総合的な学習の時間」に対して学生が抱くプラスのイメージ

- |                                  |                        |
|----------------------------------|------------------------|
| 1. 楽しくない【12/13：13個の選択肢中の順位】      | 9. 教師（現場）が戸惑っている【4/13】 |
| 2. 学力低下の原因となりうる【9/13】            | 10. 教師の負担が大きい【6/13】    |
| 3. 生徒に「授業」だと認識させることが難しい【5/13】    | 11. 専門知識が必要となる【7/13】   |
| 4. 他教科の補充時間・学校行事などにあてられる【1/13】   | 12. 評価が難しい【3/13】       |
| 5. 教科書がない【11/13】                 | 13. その他【13/13】         |
| 6. 結果が目に見えない【8/13】               |                        |
| 7. 生徒に学ばせたいことが曖昧になる可能性がある【2/13】  |                        |
| 8. 小・中・高校で内容が重なってしまう恐れがある【10/13】 |                        |

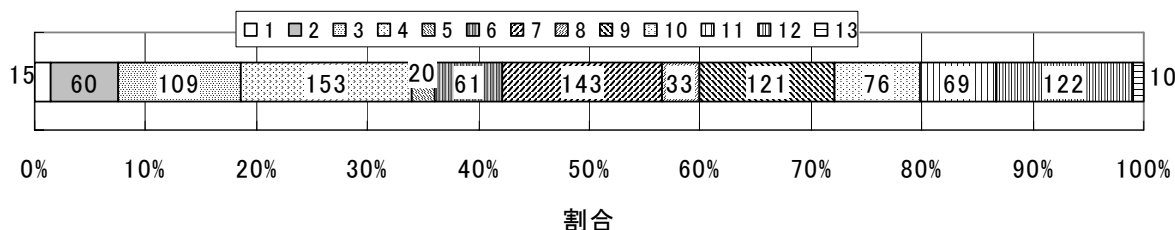


図3. 学生が考える「総合的な学習の時間」の問題点

教師（現場）の戸惑いや授業が教師の能力に左右される事への不安や疑問が示された結果といえる。これに対して、専門知識の必要性や教師の負担増加に対しては、70名前後と約3割の学生が問題視していることが分かった。なお、この専門知識の必要性や教師の負担増加については教育実習経験の有無による有意差は認められなかった。ところで、2(2)節で、学校現場で行われている総合的な学習の時間のテーマは概ね良いと示したが、ここで学生が問題点と掲げる内容を実際に受けた学生の評価と考えると、実施内容や教授方法の重要性が再認識される。また、このような問題点を改善

する授業運営を行うためには、教員の組織化が重要と考えられる。

#### (4) 学生の「総合的な学習の時間」に対する実践意識と大学への要望

このように種々のイメージを抱いている学生に対して、総合的な学習の時間を実施する自信があるか質問したところ、図4のように、8割の学生が自信なしと答えた。このことから、学生がこのままの状態で教員となることは、大きなストレスを抱えることになり、最終的に生徒の育成に種々の不安要素を抱えることになると考えられる。そこで、学生が実施上、教員に必要とされるも

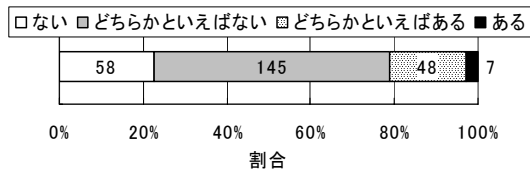


図4. 総合的な学習の時間に対する実践意識

のを図5の選択項目から複数選択をさせた。その結果、「専門的な知識よりも広範囲な知識」、「コミュニケーション能力」、「企画力」や「ファシリテーション能力」を求めていることが分かった。一般に、環境教育のように不特定多数を対象とする実践者は、ここで挙げられている能力が必要とされ、文献4で挙げたような機関などで多種多様な研修が行われているが、国立大学法人系の教育学部ではほとんど単位化された必修科目としては取り扱われていない。しかしながら、本回答者の97%は、このような内容を求めている、その実現が必

1. 企画力【3/10：10個の選択肢中の順位】
2. コミュニケーション能力【2/10】
3. マネージメント能力【6/10】
4. 語学力【8/10】
5. ファシリテーション（学びの促進者）能力【4/10】
6. 専門的な知識【5/10】
7. 広範囲にわたる知識【1/10】
8. 豊富な教材【7/10】
9. その他【9/10】
10. 何が必要か分からない【10/10】

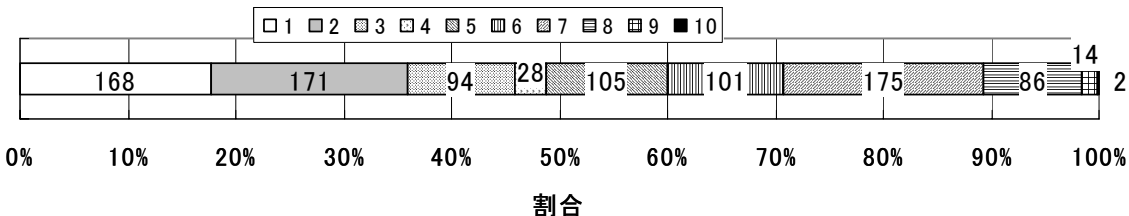


図5. 学生が必要と考える総合的な学習の時間を行う教員の能力

3. 附属学校の「総合的な学習の時間」担当教員に対する意識と実践状況に関する調査

(1) アンケート調査の概要

本調査は①附属における「総合的な学習の時間」の現状把握、②大学教員との連携の可能性、及び③学部・大学院教育への連携の可能性について検討するために、平成17年9月～12月にかけて、福岡教育大学附属3小・中学校（久留米，小倉，福岡）の総合的な学習の時間担当者に対して行った。その結果、小学校11名，中学校7名から回答を得た。表1に，その担当学年を示す。

表1. アンケート回答者の担当学年

	1	2	3	4	5	6
小学校			1	2	1	2
中学校	2	1	3			

要であると言える。現在、福岡教育大学では、公開講座や任意の研修会でこのような内容を扱っており、回答した学生のうち、図5の内容を受講した経験があるががある学生は117名、未経験の学生は148名であった。なお、経験がある学生のうち、語学力やコミュニケーション能力を外国語科目と混同した学生がいることを考えると、未経験の学生は更に増加すると考えられる。実際に、1章で示した福岡教育大学の教養科目（総合科目）「総合的な学習の時間」の存在を把握していない、或いは受講していない学生は約9割に達する。この理由は、単位の上限設定や開講日程の不一致、専門科目の重視があり、学生や指導教員に総合的な学習の時間への理解・意識が低いことが原因と考えられる。なお、総合的な学習の時間の受講経験やイメージの有無による学習意欲への有意差は認められなかった。

(2) 実施状況

図6に，小・中学校の総合的な学習の時間の実施状況を示す。小学校は各学年，学級ごとに活動が行われていることが分かる。一方，中学校では，クラス単位より，学年で行われる傾向が強く，教科担任制の影響と考えられる。また，表2，図7に実施内容と教科連携の状況を示す。これらより，

1. 各学年で実施
2. 複数年で段階的に実施
3. 学級毎で実施
4. 全学年合同で実施

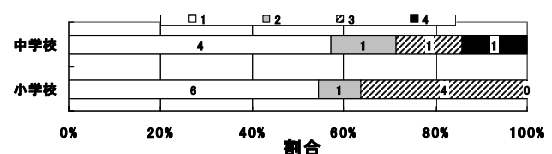


図6. 総合的な学習の時間の実施形態

表2. 附属小・中学校で実施されている「総合的な学習の時間」のテーマとねらい

学年	テーマ(単元名)	ねらい	概要	連携教科
小・3	パソコンで文字を打とう	情報活用能力の育成	パソコンで文字を打ち、字体・大きさを変える技能をつける。	各教科
小・4	延命寺川調査隊	課題発見能力、 情報活用能力の育成	延命寺川やその周辺の自然を守るための活動について、資料・インターネット等を活用して調べ捉えることができるようにする。	(社・理) 国・数・社・理・道
小・4	つくろう 小倉の雑煮	分析能力、 郷土愛の育成	各家庭の雑煮から、地域差を調べたり、実際に作ったりする。	国・社・理・道
小・5	福岡城築城400年!よみがえるまぼろしの天守閣	課題設定、 情報収集能力の育成	福岡城の建築家と協力しながら自分の天守閣を作り上げていく。	国・数・社・図
小・5	見直そう!お菓子とのかかわり方	課題設定、 情報活用能力の育成	お菓子とのかかわり方について、お菓子職人と協力して答えを探し出す。	国・数・社・理・家・保
小・6	つくろう!あつ座 歌舞伎組	情報収集・分析能力の育成、 文化創造	歌舞伎役者の方とともに、自分たちの歌舞伎を創り、伝統文化の継承。	国・社・図・音・体・特活
小・6	私たちの 小倉ステーション	情報活用・課題解決・情報処理能力の育成	JR小倉駅について、そこで働く人々、施設などの工夫について、体験を通じた学習の実施	国・数・社
小・6	鉄の鼓動	課題発見・自己表現力・問題解決能力の育成	新日鉄の方々を中心に北九州の鉄をつくる技術が今何に活かされているのかについて学ぶ。	国・数・社・理
中・1	私たちの身近にある福祉	課題解決・情報収集	地域の福祉施設へ体験活動 他	
中・1	基礎的实践	基礎的学習習慣を獲得・発揮する。	学校施設の使い方や発言・発表の仕方などサテラシー学習。	全教科
中・1, 2	社会的実践	自分分析能力、 自己改善能力の育成	自然体験学習・職場体験学習・歴史体験学習・社会貢献学習	全教科
中・2	自分の将来を考え生き方を作ろう	人間関係形成、将来設計能力の育成	北九州市内39ヶ所に3日間職場体験学習に行った	
中・2	日本の文化を五感で感じ取ろう	人間関係形成、意思決定能力の育成	京都を題材にした歴史体験学習。	
中・3	一人一研究	意思決定能力の育成	3年間で培った学力を活かして卒業論文を作成する。	国・数・社・理・道
中・3	海外から日本を見つめて	人間関係形成、情報活用、 意思決定能力の育成	韓国での体験交流活動を通して、日本と韓国の将来像について考え、自己・集団分析を行う。	
全学年	関連実践	獲得した学力を充分に発揮する。	発表会や教科内大会などを開き実践に生かす。	各教科

1. 意識している 3. 教科により意識している  
2. 特に意識していない

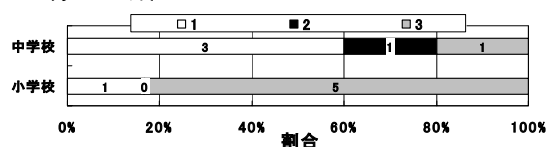


図7. 各教科の学習との意識的な関連性

小学校では、クラス担任が全ての教科を教えているため、教科ごとに総合的な学習の時間との関連づけが行いやすく、また、教科の学習内容にも地域を題材にした内容が多いことから、教科と総合的な学習の時間の学習内容の関連づけが十分行わ

れていることが分かる。一方、中学校では、各教科で学習した内容を用いた総合的な課題解決学習が行われているために、小学校より教科との関連づけが意識されているといえる。但し、修学旅行先での調査活動のような内容や福祉活動は、教科の学習内容との関連づけが十分に図られておらず、「特に意識していない」という回答が選択されたと考えられる。

### (3) 実施状況

表3に、総合的な学習の時間を実施した教員が考える教員や子どもに対する教育の効果と感想を示す。まず、教員の指導能力の育成については、小学校では「コーディネート力や企画立案能力の

表 3. 総合的な学習の時間の実施した教員が考える教員や子どもに対する教育の効果・感想

	校種	とても思う	思う	余り思わない	思わない
1. 教師の指導能力の育成が図れる	小学校	29	57	14	0
	中学校	67	33	0	0
2. 教師の知識の幅が広がる	小学校	57	43	0	0
	中学校	80	20	0	0
3. 子どもの総合能力の育成に適している	小学校	29	71	0	0
	中学校	67	33	0	0
4. 子どもの主体性が高まる	小学校	29	71	0	0
	中学校	67	33	0	0
5. 他にやることがあって不要	小学校	29	0	57	14
	中学校	0	0	60	40
6. 外部との連携が面倒だ	小学校	0	29	57	14
	中学校	40	40	0	20

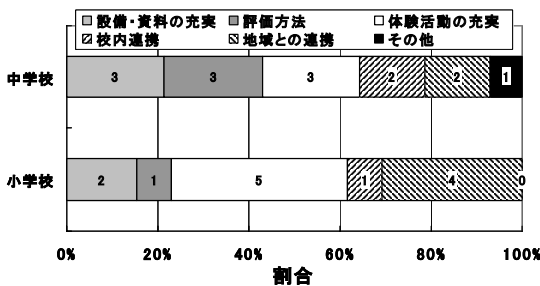


図 8. 実施上の課題

育成、ファシリテーション能力の育成」が挙げられ、中学校では「コーディネート力、コミュニケーション能力、評価能力の育成」が挙げられた。そして、教員の知識の幅が広がる理由としては、教師自身の自己学習や生徒からの学びが挙げられた。次いで、子どもの総合能力の育成が図れる理由としては、小学校では「方法知学習、まとめ方の学習、コミュニケーション能力の育成と教科で学んだ知の補充・深化・統合」が挙げられており、中学校では「学校教育以外の学習、まとめる能力の育成、知識の統合」が挙げられた。更に、子どもの主体性の向上が見られる理由として、小学校では「興味関心のある内容・体験活動が主のため、学び方を学習しているため、子どもの課題意識・興味関心によるから」が挙げられており、中学校では「自らの課題であり、やらざるを得ないから」であった。このように、児童・生徒の学習面や教員自身のスキルアップに対する効果は教員が認識していることが確認できた。一方、教員の総合的な学習の時間に対する意識として質問した「他にやることがあって不要」と「外部との連携が面倒だ」については、校種によって賛否が分かれた。まず、前者の質問に対しては、校種によらず「教

科とは役割・立場が違うので必要である」と考えているが、小学校の一部の教員は「教科の時間が不足しているため不要」と考えていることが分かった。そして、後者の質問に対しては、小学校では3割弱の教員が外部との連携を面倒と感じているが、努力して実施していることが分かった。一方、中学校では8割の教員が面倒と感じており、その理由として「地域や保護者の理解を得ることが大変だ、外部との日程調整に時間がかかる」ことを挙げていることが分かった。

図 8 に、現職教員が総合的な学習の時間を行う上での課題と感じている内容を示す。図より、小学校では体験活動と地域連携の充実が求められており、中学校では授業時に使用する資料や設備と体験活動の充実および評価方法を課題としており、中学校では連携についての要望は低いことが分かった。なお、その他として挙げられた課題は、「時間の確保」であった。

#### 4. 附属学校と大学の連携の可能性

##### (1) 学生が望む「総合的な学習の時間」に対するカリキュラム

学生の開講希望形態を図 9 に示す。図より、学生は教養科目で通常開講の形態を望む傾向があることが分かる。また、その内容は、附属学校などの現職教員から実践内容や苦労話に関する講義や附属学校での体験学習を希望する学生は9割に上った。また、体験実習の活動形態としては、実習が120名、ボランティアが120名、T.Tが69名、その他が3名であり、実習やボランティアの形態での活動を望む傾向が強いことが分かった。ところで、総合的な学習の時間を実施する教員に必要な能力である企画力やファシリテーション能力の育成には比較的まとまった時間が必要であることを

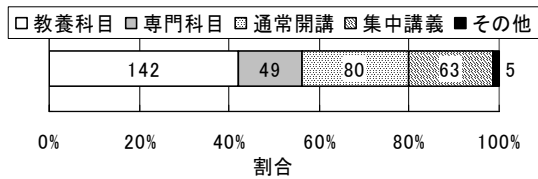


図9. 学生が望む開講形態

考えると、広範囲にわたる知識やコミュニケーション能力については教養科目で通常開講の形態を、企画力やファシリテーション能力については集中開講の形態をとることが望ましいと考えられる。

(2) 附属学校が考える大学との連携

附属学校が学部・大学院教育と連携可能と考える内容は、図10に示すように、「講義等へのGT・TTでの貢献」、「教育実践例の提示」、「学生受入による実践力の育成」の順に高いことが分かる。従って、学生が求める実習やボランティア活動は実施可能と考えられる。

ところで、附属学校で総合的な学習の時間を担当している教員が考える福岡教育大学の学部・大学院教育で必要な内容を図11に示す。ここで、図の縦軸は、選ばれた数字の順位を逆順として読み、その順位の数に1/7を掛けて総和した値を項目ごとにグラフ化したものである。図より、小学校教員が大学教育で求める内容は、コーディネート能力の育成を最も重視しており、次いで、企画立案、コミュニケーション能力、教科の基礎基本、評価などの能力の育成であることが分かる。一方、中学校教員は、企画立案、指導方法の能力育成を最も重視しており、次いで、小学校と同様の項目に

加えマネジメント能力の育成が挙げられた。この結果は、学生や著者らが必要と考えている教員の能力と一致しており、現在求められている教員の資質・能力の向上に関する項目とも合致するものと言える。

1. 関連講義等へGT・TT活動による教育実践協力
2. 大学の機材・教材の活用による教育実践例の提示
3. TA学生の受入による実践力の養成
4. 大学主催の関連講座・研修への参加協力
5. 大学主催の関連講座・研修の企画立案・実施協力
6. その他 ( )

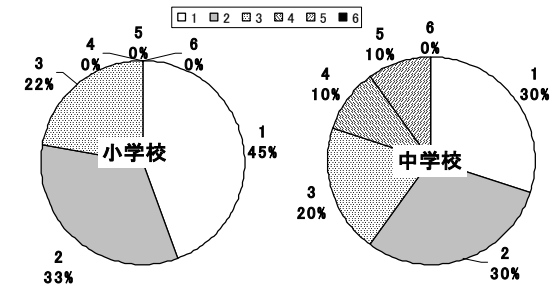


図10. 附属学校が考える大学との連携内容

(3) 大学が開講すべきカリキュラム内容

以上の結果より、教員養成大学が総合的な学習の時間を担える教員を育成するためには、次のような内容をカリキュラムに導入する必要がある。

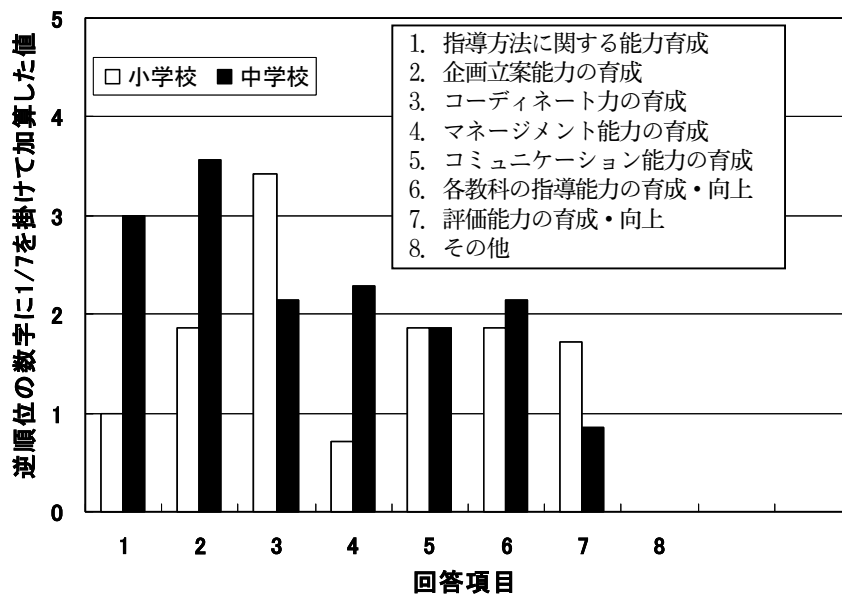


図11. 附属学校教員が考える学部・大学院教育で育成すべき能力

- 1) コミュニケーション論とその実習
- 2) ファシリテーションの基礎と応用(指導方法)
- 3) 体験型学習法の理論と応用(参加体験型授業の作り方, ワークショップ論なども含む)
- 4) プログラムデザインの基礎と応用(企画立案・評価方法も含む)
- 5) マネージメントの基礎と応用(企画立案)
- 6) 総合的な学習の時間の実践(実践例の紹介と体験実習)

この内、1～5については、既に、学校教育等の課程・専攻で行われているものもあるが、より実践的な内容にするためにも、講義・実習の形態にしなければならない。また、より実践的にするには、教員・企業研修等での講師経験者を非常勤講師として採用することも必要と考えられる。

## 5. 結言

総合的な学習の時間を担うことができる教員の育成を図ることを目的として、福岡教育大学学部生と附属学校担当教員に総合的な学習の時間に対するアンケート調査を行い、大学教育へのカリキュラム化を検討した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 現行カリキュラムの関連科目の受講割合は、上限設定や開講日程の不一致、専門科目の重視のため20%以下である。
- 2) 平成17年度における在学生(被験者)の総合的な学習の時間の受講経験は約6割が未経験であり、その実践意欲も20%以下と低いことが分かった。
- 3) 学生が総合的な学習の時間を担うために必要と考える能力は、「専門的な知識よりも広範囲な知識」、「コミュニケーション能力」、「企画力」や「ファシリテーション能力」である。
- 4) 学生の9割は附属学校での実習やボランティア

活動を求めている、附属学校も大学との連携内容として、講義への協力や学生受入による実践力の育成を挙げており、学生が求める実習やボランティア活動は実施可能である。

- 5) 附属学校の担当教員が考える学部教育で育成すべき能力は、企画立案、コミュニケーション、教科の基礎基本、評価、指導方法、マネージメントであることが分かった。

## 謝辞

本研究は福岡教育大学中期目標・計画にある教員養成に関する諸課題に関する研究として、平成17年度から実施されている附属学校・園との連携による学内研究プロジェクト「教員養成大学が現代的教育課題に対応するための基盤整備・元気になる授業の創り方」に基づいており、福岡教育大学から助成を受けた。ここに記し、謝意を表す。

## 参考文献

- 1) 荒川智ら, (2001年), 障害児の「総合的な学習の時間」, 全障研出版部, 12-59.
- 2) 増田ユリヤ, (2000年), 総合的な学習—その可能性と限界, オクムラ書店.
- 3) 藤本登ら, (2005年), 福岡県におけるエネルギー環境教育に関する実態調査—学校と学外教育支援団体の連携について—, 福岡教育大学紀要, 54(4), 283-292.
- 4) 独立行政法人国立少年自然の家国立山口徳地少年自然の家, (2002年), 平成13年度主催事業環境教育担当教員講習会(西部地区)実施報告書.
- 5) 高田研ら, (2001年), 人権の学びを創る—参加型学習の思想, (社)部落解放・人権研究所, 65-92.

## Summary

Intending to foster teachers who could teach classes for integrated study, a questionnaire survey was carried out for students at Fukuoka University of Education and teachers at university-affiliated schools, and adding the outcome to the educational curriculum at the university was discussed. As a result, it has become clear that few classes are offered to cover the integrated study and the class attendance for those classes is less than 20%. The necessary ability students consider to be crucial when teaching integrated study are: extensive knowledge that goes beyond specialized knowledge, communication skills, planning ability and facilitation ability. These answers are also corresponding to the ability that teachers at the affiliated schools consider to be necessary. Also, according to the survey, students hope to have some information on the actual class teaching and want to do practice teaching at the affiliated schools. And those schools are able to respond to their request. The problem of securing teachers, however, has also become obvious.